

Title	「人口論」批判(上)
Sub Title	
Author	津田, 誠一
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1923
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.17, No.4 (1923. 4) ,p.634(138)- 663(167)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	雑録
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19230401-0138">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19230401-0138</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

新に出現せる工業部門に對し當初より國家的組合を創設するによりて斯る國民化を成就したのである。而して、經濟形態が恰も其當時、多數の工業に於て際會したる手工業より、家内工業への變化と共に新なる國家的組合は既に最初より家内工業制度の性質を有した此國家的工業團體の形態は第十七、八世紀を通じて總べての國々に新に多數に出現し、其時代の工業組織に其特徴を與ふる所のものである。此組合制度の國民化は英國及フランスに於て、統一傾向の盛なるにより、既に中世に於て生じたのである。(S. 391) 以上を以て、ゾムバルトのマーカンチリズム概觀及商工業政策論の概要を述べ終りたれば、以下、先づチユードル朝時代殊にエリザベス朝に於ける工業組織の如何なりしか及之に對する工業政策の影響とを觀察する。(未完)

の大成に資したのである。特に彼れが人口の幾何級數的增加と、食糧の算術級數的增加を云爲せるは、時人後人の激烈なる非難を惹起する誘因の一となつた。今私は Edwin Cannan の「人口論」批判を通して、此種の非難の要旨と價值とを點檢したい。

Cannan に從へば、若しマルサスが單に Wallace の如く人口の増殖が窮極に於て妨遏せらる可き事を立證せんと欲したのであれば、それは正しい。蓋し地球の廣袤には制限があり、隨つて是に棲息す可き人口にも所詮制限あるは自明の理である。乍併マルサスは常に其の學説が、かゝる解釋を下される事を侮蔑し拒否してゐる。彼は人口増殖に對する制限の、二六時中必要不可欠のものたるを立證せんと企圖したのである。而して彼れが「人口の力は生存資料を産出する土地の力よりも無限に偉大である」と云ふ時、

### 「人口論」批判 (上)

津 田 誠 一

Boar は「謂はゞアダム、スミスは何人も賞揚し、然も何人も味讀せざる著書を殘し、マルサスは何人も味讀せず然も何人も非難する著書を殘した」(Malthus and His Work, p. 3)と云つてゐる。誤解の上に不當の非議を蒙れる、マルサスの如く甚しきは稀有である。乍併、斯く「人口論」が萬人嫌忌の對象となれるは、偶々それが萬人の注意を喚起するに足る權威ある内容を具備せる證左である。其初版は洵に吵たる小冊に過ぎざりしに拘らず、出現の當初より忽ち學界に囂々たる論争を沸騰せしめた。而してマルサスは衆多の論敵に對する應酬に依り、愈々其學説

彼は現在を考慮してゐるので、決して遙遠の將來を考慮してゐるのでは無い。(Cannan: Theories of Production and Distribution 3rd ed. p. 136) 其證左として Cannan は次の如きマルサスの言辭を引用する。即ち

「人口の作用を以て平等の社會組織の全基礎を崩壊せしむるものと思惟せる Wallace 氏すら、全地球が田園の如く開墾せられ、其上の生産増加が最早不可能となる時の至るに先立つて、該原因より諸種の困難の發生す可き事を知悉しなかつたらしい。若しかゝる見解が眞正であり、且つ他方に於て美はしき平等世界の實現を可能とせば、余と雖這個の企劃を追求する吾人の熱意が遙遠の困難に對する配慮の爲に沮喪せらる可き必要を見ない。かゝる遠隔の事故は須く天の攝理に委ねて可なりである。然し實際に於て若し余の論述する見解を正當とすれば、這裡の困

難は決して爾く遙遠にあらず直接焦眉の急である。若し全人類を平等の境地に立たしめば、現時間より全地球が田園化するに至る迄の耕作進展の途次の何れの時期に於ても、食糧缺乏の悲歎は始終總ての人々を壓迫するであらう。假令土地の所産年々増加するも、人口更に急速に増加し豊饒は必然罪惡慘禍の周期的なる或は不斷の作用の爲に阻害せられるであらう」(Malthus: op. cit. 1st ed. pp. 142-144. 2d ed. pp. 353-354)

而して、Cannan は云ふ、かくマルサスが人口過増の傾向を以て即時の禍害と思惟したのは、「是れ彼れが自ら創見せる惑はしき數學上の計算に依て、自ら偽かれた結果である。彼は人口は何等の障碍無き限り幾何級数的に増加するに對し生存資料は唯算術級数的に増加するに過ぎずと稱し、前者の例として廿五年毎に二倍に増加する場合は、後者の例として廿五年毎に最

得たる事の立證とはならぬ。假に産額が年々千分之一宛増加するに過ぎずとするも、或は五萬年毎に増加するとするも、尙それは幾何級數を以て増加しつゝあるのかも知れぬ。」(Cannan: Theories of Production and Distribution. 3d ed. p. 140) 且つマルサスが「人口は廿五年毎に優に倍加すてふ立論を、北米の實例に依つて證明せるは甚だ鞏固なる論據を採れるものなるも、然も「食糧問題に關しては彼は北米の實例より眼を轉換して讀者に對し、何處にても世界の或る地點例へば英國に就きて、其生活資料の産額は凡そ如何なる比例を以て増加しつゝあるかを省察せよ」と要求せるは狡猾である。何に故ならば、

マルサスは一七九八年以後の五十年間に於て、大英帝國の産物が到底四倍せらるゝ能はずと論斷せるも、翻て北米の各植民地を見るに、上述の期間内に其生産物の二倍とな、又四倍となれ

初の額と等額だけ増加する場合を擧げてゐる。今是等二種の級數、即ち一・二・四・八……と一・二・三・四・五……とを併列する時は、第二項以下は前者が後者よりも著しく急激に増加するは明白である。是れ彼れが「生活資料に關する困難よりして人口の上に力強く且つ不斷に作用する抑制なるもの、必然存在せざる可からざる事を推究せる所以である。」(Cannan: Wealth. p. 57) 此推究の第一の錯誤はマルサスが「幾何級数的に増加する事が、必ずしも廿五年毎に倍加する事と同一にあらざる事を看過せる點である。英國に於ける生活資料の年産額を廿五年毎に無際限に増加せしむる事は、疑も無く不可能事であつた。又それが廿五年毎に一七九八年當時の年産額と等額だけ増加し得可き事も覺束無かつた。然しそはそれが幾何級數を以て増加し得ざりし事、若しくはそれが單に算術級數を以て増加し

るは明白であるからである。既に何處にもせよ一旦かゝる實例の存せる以上は、生存資料は二十五年毎に最初と等額だけ増加し得るに過ぎざる事を、一般的命題として立言するが如きは誤謬である。況や「假令吾人は此命題を以て一七九八年當時に於る大英帝國と同様に、人口稠密なる國家にのみ其適用を限定するも、尙マルサスの議論は、恰も幾何學の受験者が提示せられたる命題をば、正確には證明し得ずしに唯甚だ眞實らしく之を解説し得たりと主張するに似て、」(Cannan: Wealth. pp. 57-59)。

## 二

人口問題に關する Cannan 自らの所見は暫く措き、以上はマルサスの「人口論」を對象とせる彼れの批判の概要であつて、其主眼は第一人口過増の傾向より發生す可き禍害を直接焦眉の急

と思惟する誤謬は、マルサスが人口の幾何級數的增加並に食糧の算術級數的增加を確く信ずる爲である。第二、二十五年と云ふ特定の年數毎に倍加する事と幾何級數的に増加する事とを同一視し、且つ人口増加の實例を北米に採り乍ら食糧増加の實例を英國に採れるは、自説を強辯せんが爲の不正なる論法であると云ふに歸着する。而して其論難の全基調が、如何にマルサスの云爲せる増加率に重心を置けるかは一讀にして明白である。

今如上の批判を検するに數學的直喩の使用に多少の難點はあれ、人口並に食糧増加の實例を單一にしなかつたのは必ずしも非難す可きでない。蓋し「亞米利加植民地の如き新開國に於ては、固より食糧増加は人口増加と歩調を共にす可く、耕作改良或は交通發達に依る豊饒なる地域の激増は、勿論居住民の富源を無限に擴大す

るであらう。乍併、マルサスの考慮せるは人民が嚴密に制限せられたる地域より、従前より一層多量の收穫を抽出するの要ある現狀に於る事項である。マルサスが斯かる状態を目して、一般普通の場合と速断せるか否かは疑問とするも、兎に角それは當時の英國に於て當に起り得可き状態であつた許りで無く、亦實際の状態であつたのである。彼れの問題は能く現實に適合してゐた。彼れの目的は或る制限せられたる地域の人口が、幾何級數的增加を妨遏せらるゝ、經路を探索する事であつた。英人の子孫が亞米利加に於て一定の比率を以て増加すとせば、何に故英國に於ては同様に増加せざる乎。是れ何人も認容す可き立派な科學的問題である。同一の起源より發し、随つて近似の性情を有すと推せらるゝ兩種族が、相異なる比率を以て増加するを見る時、吾人は其相違の原因を究明し

なければならぬ。マルサス是其著の初版に於て最も簡潔に且つ最も矛盾無き解答を與へたのである」(Leslie Stephen: The English Utilitarians. Vol. I. Pp. 149-150)。

更に Cannan が假令一七九八年當時の英國の如き既に人口の稠密なる國家にのみ適用するも、尙マルサスの人口法則の虚妄なるを斷言せるは如何なる論據に基く乎。そは明に彼れが人智の發達技術の進歩に依つて生存資料の生産額を激増せしめ、之を以て長足の人口膨脹に優に對應し得可き所以を過去に徴し將來に確信するが爲である。乍併、此點に關しても尙マルサスを辨護する事が出来る。固より農業經營の技術知識の發達に依つて、小麦其他の生存資料が最近一世紀の間に驚異す可き年産額の増收を見たるは周知の事實である。それは算術級數的增加よりも遙に急速である。然し生存資料が假令人口と

共に七倍したとしても、それはマルサスの論點を覆すものではない。如何となれば彼は總ての何れの食糧増加に就きても言及せるにあらざして、唯過去の支給額を産出せると同種の方法、及び同種の勞働に依る食糧増加に關してのみ論じてゐるのである。一旦、新たに人間を産出するには過去の總ての時代に於るより以上の何等の努力を要せざるに拘らず、新たに食糧を生産するには一層の勞働と新奇の改良を要する事が認識せらるれば、爰に既に兩者の差違は認容せらるゝ道理である。兩者の作用が共に人間の行為に懸り、且つ共に實際上無際限なるの事實は、決して是等の兩者が其本質を異にする事を妨げない。反對論者は往々人口が食糧を凌駕する傾向は、人口の皆無なる土地若しくは其稀薄なる土地の存在と矛盾するが如く思惟するも、是れ物體が相互に索引する傾向が、恰も物體の不收

縮性と相矛盾すと云ふが如き謬見である。着眼す可き重要な點は、一の力が他の力よりも偉大なる事である。兩種の力の關係は偶話に於る兎と龜の如きものである。遲足の龜を競争に勝たしめんが爲には、兎を眠らしめねばならぬ」(Bonar: Malthus and His Work, pp. 69-70) 是れマルサスが人口過増の禍害を防止する爲に、道徳的抑制の必要を力説する所以である。彼れが決して通常思惟せらるゝが如く、科學や理性を無視するものにあらざる事は後に再言する。爰には單に生産技術の發達に伴ふ長足の食糧増加が、必ずしも彼れの學説と矛盾せざる事を表明するに停める。次は増加率の問題である。

## 三

Cananの所言の如く「マルサスに於ては人口問題は、吾等に於ると異り、人口の密度と産業の生産力との問題では無く、人口増加と食糧の年

換言すれば彼れの學説は人口の幾何級數的增加並に食糧の算術級數的增加を前提とせざれば、單に前者が後者よりも急速に増加すと云ふのみにては成立し能はざるかの問題である。

此點に關する Hacyの解釋は甚だ同情に満ちてゐる。曰く「マルサスの確立せんとしたる方式は、恰も彼れの學説の精髓が食糧の算術級數的增加並に人口の幾何級數的增加の上に存立するかやうに、屢々非難を享受した。乍併そは事實に反してゐる。蓋しマルサスの學説の主眼は、總ての生物には是に對する營養資料を超えて増加する所の不斷の傾向あり」と云ふ一句に包容せられてゐる。然るに其方式を屢々(一)人口は幾何級數的に増加す。(二)生存資料は算術級數的に増加す。(三)此兩種の相異なる増加率より發生する不均衡は、必然戦争、罪惡、慘禍を惹起すと云ふが如くに解するは不當である。

産額増加との速度比較の問題である。彼れが人口膨脹を制限するの必要を感じたる所以は、人口が或る經濟的限界に接近若しくは超過したる爲にあらずして、唯單に食糧の年産額を「制限せられざる」人口の増加と、同一の速度を以て増加せしむる事を不可能と思惟せる爲である」(Canan: Theories of Production and Distribution, 3d ed. p. 138)。此點までは何人も異論無き所である。要はマルサスが食糧増加を「制限せられざる」人口増加に追隨せしむる事を不可能と爲すは、將して Cananの云ふが如く彼れが「制限なき時は人口は幾何級數的に増加し、食糧は單に算術級數的に増加す」と文字通りに確信せる爲なる乎。或は J. S. Millの辯護するが如く、マルサスは單に説明の便宜上如上の數學的比喩を云爲するの「冒險」を敢て行へるものであつて、毫も之を重視するの意志無かりし乎。

斯の如き表示はマルサスの著述の何處にも發見する事は出來ない。其後版に於ては彼は單に人口の傾向に就きて語るのみである。彼れの意味する所は、人口は増加するに従つて愈々其増加力を増大し、而して其増加欲にして保證せられんか、或る種の防遏の作用せざる限り、其増加を實現す可しと云ふのである。其實現の可能性に至つては是れ生理學上の問題のみ。假に他の條件を同一と想定すれば——固よりマルサスはさう信じたのでは無いが——四百萬の人口が一百萬を増加して五百萬となるは、一百萬の人口が一百萬を増加して二百萬となるよりも容易である。是れマルサスが人口は幾何級數的に増加するの傾向ありと云へる本質的眞意義であると思はれる。

然らば土地に依頼する限りの生存資料に至つては如何。(マルサスが其人口法則に於て原料の

始源として言及せるは農業であつて工業では無い。此の場合に於ても尙人口の場合と其の事情等しき乎。土地は其の生産力を増加する毎に更に一層容易にそれ以上の生産能力を増大するであらう乎。如何なる農夫も之を否定するであらう。例へば従前六十ブッシェルの馬鈴薯を産出したる一エーカーの土地が、丹念に改善せられ、て八十ブッシェルを産出するに至りしとせよ、總ての經驗に徴するに此物産の産額を八十ブッシェルより更に百ブッシェルに増加せしむるは、六十ブッシェルより八十ブッシェルに増加せしめし時の如くに容易では無い。其容易にあらざる事を立證するは難事では無い。蓋し假に一定量の注意と労働とが例へば穀物の一定額を産出し、其注意と労働を倍加すれば産額も隨つて倍加し、三倍すれば産額も三倍し、かゝる調子に進行するものとすれば誰しも其田圃の面積を擴張せんと欲

するもの無きは明かである。即ち五エーカーより百五十ブッシェルの小麦を生産しつゝある農夫が、千五百ブッシェルを生産せんと欲すれば、彼は單に其五エーカーに従前の十倍の注意と労働とを投費すれば可なる道理である。そは別に四十エーカーの土地を購入するに比し低廉である。何故ならば五十エーカーの土地は五エーカーの土地よりも多量の勞作を要求し、結局農夫は四十五エーカーの土地購入の代金に對して何等の報償を得ないからである。然し假に最初の生産額を二倍せる後に、更に之を三倍する事が二倍せし時の如くに容易なりとし、又最初の生産額を二倍せる後更に之を四倍する事が、三倍せし時の如くに容易なりとするも、吾人は依然單に算術級數的增加を見るに過ぎない。是れ即ちマルサスが食糧は算術級數的以上に迅速に増加せしむる能はずと云へる眞の意味である」と

(Haney: History of Economic Thought. pp. 23

5-236)。

如上の論旨は明に幾何級數的及び算術級數的增加率を輕視すると同時に、マルサスの人口論と收穫遞減の法則とを連結せしむるものである。然もかゝる見解は絶対に Cannan のそれと相容れない。

四

再び Cannan に従へば「論者往々マルサスが其幾何級數的及び算術級數的增加率に殆ど或は全然重きを置かずと説くも、かゝる所論は毫も根柢無きものである。一定期間内に於る平均年産額は算術級數を以て増加する事覺束ない、換言すればマルサスの所謂生存資料は單に算術級數を以て増加するに過ぎずとの論旨を彼れの學說より除去する時は、「人口論」は其議論の論據を失ひ、畢竟存在せざる法則の作用を説明する

爲の難然たる事實の蒐集に過ぎぬものとなるのである。算術級數的增加説を餘所にしては、「人口論」中何に故人間の生存資料が「制限せられざる」人口と、同等に増加せざるかを明示するものは皆無である。「神は一人毎に一對の手を賜ふ」。然らば何に故に多大の人口は僅少の人口と同様にそれ自身を支持し得ない乎。

今日に於ては勿論經濟學の最低劣なる初心者と雖、即座に「收穫遞減の法則の爲に」と答へる。乍併該法則は大戦の終末期に至るまでは事實發見せられなかつたのである。マルサスは恐らく其初版に於て諸所に該法則の暗示を披瀝してはゐやう。又第二版に於ては彼は確に該法則の基礎をなす基本的觀念を、偶然の且つ從屬的議論として用ひてはゐる。而して後版に至つては該法則の存在は屢々認識せられてゐる。然も之を以て「人口論」は收穫遞減の法則の上に基礎

を有すと想定するは、是れ J. S. Mill に依つて解説せられたマルサス主義とマルサスに依つて解説せられたマルサス主義とを混同するものである。不注意なるマルサスの讀者は、「農事に關して極めて些少の知識を抱くに過ぎぬ者と雖、耕作の擴張に比例して従前の平均産額に追加せらるゝ年産額は、毎年徐々に且つ規則的に低減するを知る」(Malthus: op. cit. 2d ed. p. 7: 8th ed. p. 5) のマルサスの言辭の中に、收穫遞減の法則が包含或は演述せられてゐると想定しがちである。乍併此言辭は何等生産者の一人割の所産に就いて言及してゐない。一方眞の收穫遞減の法則は何等産額の年々の増加には關與する所無きものである」(Cannan: Theories of Production and Distribution. 3d ed. pp. 143-144. p. 144. Note.) 假令「人口論」の後版に於ては、初步の形態に於る收穫遞減の法則を散見するも、

此法則が其死後幾許も無く幾何級數的並に算術級數的增加率を排除して、「マルサス學說」の基礎に採用せられんとは、マルサスの夢想だもしなかつた所であると云ふのである。

然るに Haney は斯の如き解釋を蔑視し、隨つて Cannan の所説に搏撃を加へてゐる。以爲らくマルサスの學説は明に土地に關する收穫遞減の法則を包含する。如何にも Cannan の所言の如く前掲のマルサスの言辭は、年産額の遞減を歴史的に觀察せるものであつて、或る一定の時期に於る一定の技術を基礎とする收穫の遞減を、嚴密に叙述してはゐない。然し彼は他の箇所にて突然人口の減退したる場合を論じ、「かく減少せる人口は勿論主として其領土の比較的豊饒なる部分を耕作し、隨つて人口の多かりし時の如くに難有からぬ土地に適歸するの必要無し」(Malthus: op. cit. 2d ed. p. 472) 云々云々

又「總ての豊饒なる土地が追次耕作に用ひられて餘す所無きに至れる曉には、食糧の年産額の増加は必然既に占據せらるゝ土地の改良に待たねばならぬ。然るに此資源たる、總ての土地の本質上、増大せずして却つて漸次低減するに相違無し」(5th ed. pp. 9-10) と云つてゐる。是に徴するにマルサスは農事改良が、收穫の遞減を開始す可き事を認識してゐたのである。彼れの誤謬は斯かる改良並に運輸の改良の範圍と繼續とを、過小に見積れる事に存する。此點に關する Cannan の批判は寧ろ皮相であり苛酷である。マルサスの議論の全責は、人口と物産との對比に存するのである」(Haney: History of Economic Thought. p. 237. Note)。

今兩者の所論を比較検討するに、増加率の問題の關與する限りに於ては、私は寧ろ Haney の見解に多くの共鳴を感じるものである。既に述

べたる所のマルサスの人口法則の根幹をなす三條の命題は、重版に隨つて多少の辭句の修訂を受けたが、然も幾何級數的並に算術級數的增加率は、遂に此命題の中に招致せられた事は無い。此點より觀察するも彼れが這般の數學的直喩に多大の意義を賦與せるものとは思はれぬ。若し夫れ收穫遞減の法則に至つては、それが今日知らるゝが如く嚴密なる意味に於てマルサスの腦裡に浸潤せりとは固より首肯し能はざるも、然も假令漠然と又幼遅なる形態に於てにもせよ、彼れが斯かる法則の存在を陰微の間に洞見せしは否むを得ざる事實である。且又彼れが該法則の眞髓を適確に捕捉するに至らざりし事は、直に反射的に人口の幾何級數的增加並に食糧の算術級數的增加を文字通りに固執したる證左とはならぬ。蓋し其事の當否は暫らく措き、一旦人口が何等の防遏を蒙らざる限り不斷に食糧を超

えて増加するの傾向ある事を前提として是認する以上、殊更に一步を進めて幾何級数的並に算術級数的と云ふが如き特定の比率を對立せしめずとも、兩種増加の速度に差違を存する事は認容せられてゐる筈である。既に多少とも其差違の存する以上は、其程度に應じて或は自然に或は任意に、各種の制限を誘致する道理であり、随つてマルサスの人口論は立派に成立するからである。

更に又收穫遞減の法則が、全然マルサス以後の發見に懸るとするも、其事實のみにては彼れの人口法則に對する、何等の支障をも提供しない。凡そ一の學説が既に存在する時、後に發見せられたる學説が是に反對の論旨を包含すれば既存の學説が其爲に動搖を感ずるは必然である。乍併先人が一の學説を樹立し偶々其後人が其先人の關知せざりし一の新發見を爲せる時、

の將來にあらずして、直接焦眉の危殆なりと看做すマルサスの所説を、嗤笑を以て排斥し去る論據は爰に在るのである。然しそれは Cannan に獨自の思想ではない。收穫遞減の法則を輕視或は無視して人口過増の憂懼を拂拭せんとする思想の當否は、後段に於て科學萬能を信奉する樂觀論者の人口論議に論及する時に自ら闡明する。爰には單にマルサスの所謂人口の幾何級数的増加並に食糧の算術級数的増加の眞偽は、必ずしも其學説の正邪を決定する程重要な意義を有するにあらず、彼は單に説明の便宜上如上の數學的直喩を用ひたまで、あつて、其所説の眼目は唯「制限せられざる」人口は食糧を超えて増加す可き不斷の傾向有り」と云ふ一句に歸着する所以を表明すれば足るのである。然るに此の「傾向」其物も亦 Stephen の冷評を蒙つてゐる。

## 五

其發見が益々既存の學説を擁護す可き資料を呈示するならば、假令先の學説の樹立者が後の發見を豫知し能はざりしとするも、學説其物の權威は毫も是が爲に減損す可きものではない。「人口論」の著者と收穫遞減の法則の發見者との關係がそれである。即ち收穫遞減の法則にして不滅の眞理なる以上は、そはマルサスの學説に有力なる一論據を加ふるものであつて、決して反對資料では無い。故に百歩を譲つて該法則が Cannan の所言の如く、全然マルサスの念頭に上らざりしと假定するも、其事の指摘は決して「人口論」に對する權威有る搏撃とはならないのである。却つて「人口論」の反對論者の側に於て、收穫遞減の法則の虛妄か或は其の恐怖するに足らざる所以を論證するの必要がある。而して Cannan は此用意を缺如しなかつた。彼れが人口過増の傾向並に是に基く禍害の發生を、蓋遠

Stephen は云ふ「諸子は地球が太陽に衝突する一傾向を有し、又太陽より離動し去る他の傾向を有すと云ふ事が出来る。然し其故に吾等が燃焼せられ或は凍化せらるゝ危険に瀕すと論ずるは愚である。眞の地球運行の法則を説明せんが爲には吾人は之を分折し、随つて又之を相背馳する兩勢力の結果として觀察す可き必要もあらう。然しかゝる兩勢力は實際上相分離して存在するものではない。故に吾人は此具體的現象の全般を考察するに方りては、かゝる兩勢力が相互に含蓄せらるゝものとして解釋せねばならぬ。或る人が肥り過ぎる傾向を有し又瘦せ過ぎる他の傾向を有すと云はゞ、其眞の意味は彼れが概して適度の中庸を保持するの傾向を有すと云ふに歸するのである。故に「傾向」なる用語は、相背馳する勢力が、兩個の獨立せる、即ち實際分離し得可き、勢力である場合に於てのみ、始めて

明瞭なる意味を持ち得るのである。マルサスの比喩を用ひて云へば、或る人が上方に伸ぶ可き傾向を持つてゐた、然し頭上の鍾りに依つて抑壓せられたと云ふ事が出来る。此人が「傾向」を有すと云ひ得るは吾人が鍾りを以て分離し得可き偶發事項と思惟する爲である。兩個の勢力が共に本質的要素なる場合に於ては、分離せられたる「兩傾向」 tendencies は單に事實を分折する手段に適應するのみである。されど若し一の勢力が比較的偶發性のもので解す可き理由ある時は「傾向」 tendency とは現實に他の勢力が顯現す可き様式を意味するのである。然るに所謂人口増殖の傾向とは、「決して不斷の勢力換言すれば何れの人々をも同一平準に低下するが如き不可抗的本能を表示せずして、却て實際とは其實質を異にする所のものを表示してゐる。事實マルサスも亦人口と食糧との適應性 elasticity は、

の二に相違無きも、それは決して他の人爲力例へば深慮先見等の力を以て抑制し難きものでは無い。即ち増殖欲が偶發的にあらずして本質的勢力なりとすれば、抑制欲も亦偶發的で無く本質的勢力である。故に兩者 共に「傾向」 tendencies で有つて其の一のみが「傾向」 tendency なのでは無い。然るにマルサスが前者即ち増殖欲のみを本能の一と認めて「傾向」と云ひ、後者即ち抑制欲を本能と異れるものとして表示せるは不當である。之を要するに人口増加の傾向に對しては積極的には食糧増加の傾向、及び消極的には人口増殖抑制の傾向あるに拘らず、マルサスが「傾向の複數」を無視して「傾向の單數」のみを説くは誤謬である。(二)又かく増殖欲も抑制欲も兩者共に本質的勢力なるが故に兩者共にそれぞれ傾向であるを認めたりとするも、それは唯事實の分析を行へるに過ぎず、隨つて結局マルサスの「人

常に變化しつゝある事を認容し、且つ其故に總ての改良を絶望と思惟せしむるが如き解釋を拒否してゐる。然らば何に故に彼は本能とは何等か異なるものとして、「制限」 checks を説くのである乎。又それは暫く措くとするも、吾人にしてマルサスの釋明を受容する時は、其學説は「凡庸の理」 *trivial* に歸するか、或は少く共、人の感情を害せざる代りに人に教ふる所も皆無なる陳腐の事柄に歸せざる乎。それは深慮と先見は望ましくして然も不幸にも缺乏してゐると云ふ明白なる説話以上に出でないでは無さ乎」 (Leslie Stephen: *The English Utilitarians* pp. 154-156)。

今上掲の文意を參酌するに、畢竟(一)人口増殖の傾向が人類固有の性情たる性欲の結果として潜在するとすれば、他方に於て亦人類屬性の一たる理智は諸般の改良發明に依つて食糧増加の傾向を實現してゐる。更に又(二)性欲は本能

口論を彼れの辯明通りに受容するとするも、それは單に「制限せられざる」人口は食糧を超えて増加するの傾向あり、依つて道徳的抑制は最も望ましくして然も甚だ缺如せりと云ふ平明凡庸の理に歸着するのでは無い乎、その三項に概括する事が出来よう。而して私は遽に斯の如き評言に承服する能はざるものである。

## 六

第一に人口増加の傾向に對峙して食糧増加の傾向も亦存在する所以を指摘し、マルサスが特に前者のみを云爲するを偏執なりと斷ずる非難は、必ずしも後代の論客に發したのでは無い。既に Bodar に従へば一八二九年 *Scott* に與へたる書簡に於てマルサス自らが此種の非難に應答してゐる。其文意に依れば「嚴密に云へば兩傾向の比較は問題にならぬ。蓋し吾人は人口増加の傾向と同様の意味に於て、食糧増加の傾向を

説く事は出来ないからである。即ち人口はそれ自身の作用に依つて増加するが、食糧は食糧自身的作用に依つて増加するものでは無い。それは外的要素換言すればそれを所要する人類に依つて増加せられるのである。而して前者の増加は本能に基くに拘らず、後者の増加は(或る意味に於て)後天的である。食欲は本能である。然し食糧の獲得はさうでは無い。随つて吾人は本能に基く増加と、勞働に基く増加とを比較しなければならぬ。而して此比較をなさば、一見直に第一の力が第二の力を凌駕する事の莫大なる所以を知るであらう」と云ふのである。(Borah: Malthus and His Work, p. 66)。吾人は既にCannanの「人口論」批判を検討するに方つて、人口増加には何等の新努力を要せざるも食糧増加にはそれを要する事實が認識せらるれば兩者の差違が證明せらるゝ道理であつて、兩者の作用

が共に人類の行爲に發し且つ無際限なるの事實は、決して是等二傾向が其本質を異にする事と矛盾せざる所以を論述した。要するに人口増加の傾向は先天的であり且つ内在的であるに對し、食糧増加の傾向は後天的であり且つ外部的である。然らばマルサスが前者に重要な意義を賦與せるは、必ずしも非難す可き偏見では無い。爰に私は誤解を避ける爲に一言を贅する。それは私と雖マルサスが人智の進歩を豫見し乍ら、尙之を餘りに輕視したる短所は認める。否私は之を以て後に詳論するが如く、マルサス「人口論」の全卷を通じて其最大缺點の一点思惟するものである。同時に亦私が人智の進歩に關して、全然樂觀に一貫し能はざる所以も其際に表明する。唯今爰に當面の問題とする所は、人智の進歩が食糧増加に及ぼす影響の如何にあらすして、人口増加の誘因と食糧増加の誘因との間には本

質的の差違を存し、此意味に於て前者の傾向を重視するも敢て不可無き所以を論ずるに止まるのである。随つて文化の發達が食糧増加を促進し、人口増加に追隨或は優越するに至る可きか否かは、別箇の機會に論及す可き別箇の問題である。

第二に人口の増殖欲即ち性欲のみを本能と認め、人口増加に對する抑制欲を本能と分離し、前者のみの傾向を云爲するは失當であるとの非難も、亦容易に是認する事は出来ない。先づかゝる非難は、増殖欲と抑制欲と兩種の力の間に存する強度の差違を看過してゐる。例へば人類は神の心を具備すると共に、又禽獸の心を抱懷すとは西哲の至言である。如何なる善人と雖必ず善の種子を保有し、又如何なる悪人と雖必ず善の萌芽を胚胎してゐる。而してかゝる善惡兩方面の性情たる固より一個の魂の中に渾和包含せ

らるゝを以て、兩者を具體的に分離し能はざるは勿論である。然も尙此場合と雖或る人の惡の性情にして其善の性情よりも強烈なる時は、吾人は彼れを目して墮落する傾向を有する人と云ふも何等の不可無き筈である。是と等しく、固より個人的例外は有るも、人類一般に性欲が其抑制欲よりも強烈であるとマルサスが思惟せる場合に於て、彼が人口増殖の傾向を説くも敢て不可無き道理である。或は文化の高き階段に於ては、抑制欲の強度も性欲のそれに劣らざる目を假想するも、猶兩者の間には先天的と後天的との本質上の差違を存してゐる。随つて又増殖欲及び抑制欲に個人的差別有る事、換言すれば性欲が「何れの人々をも同一平準に低下せざる」事も、此相反する兩作用の本質的相違を否定する反證とはならぬ。爰に抑制欲と云ふは専ら道德的抑制を意味したのであるが、其他の制限作用

例へば疫癘飢饉の如き非人爲的のものは固より墮胎、避妊、幼兒殺戮の如き人爲的のものと雖悉く後天的の習性であつて、是を性欲に比するに本質的相違を存するは何人も認容する所である。既に然る以上は前段食糧増加と人口増加の對照に於て論述せると同様の論旨を以て、第二の非難にも應酬する事が出来る。

今「人口論」第三版の附録を見るにマルサスは時人の批評に答へて、「或る人々は人口の自然的制限は、毫も他の方法に依頼せずして、能く人口を常に適當の範圍に保つ可しと云ひ又他の天才著述家は余の引例せる事實は一として既に普及せる制限作用の不充分なる事を證明するもの無しと云つてゐる。如上の言辭は確に眞實である。否それは人は食物無しに生存する能はずと云ふと全然同斷の自明の理である。蓋し人口法則の存續する限り、爰に所謂自然的制限の効果が不

他の意味に於てマルサスが人口増加の傾向を過重視するとの非難は、爰に取扱ふ當面の問題では無いのである。

第三にマルサスが人性に關する複雑なる諸現象、衆多の傾向中より、特に性欲なる一事項を抽出し來つて之を研究の對象としたのは、科學者として極めて當然の態度である。「アダム・スミスが(自利的欲望なる)人類の一屬性を捕へ來つて、それが人類の産業及び進歩に與ふる効果を探求せると等しく、マルサスは(性欲なる)一特殊情欲の効果を省察するのである。彼は野蠻、未開、文明の特徴をそれぞれ保有する各種の國民に就きて、如何なる程度にまで性欲が道德的抑制に依て其勢力を阻止せられたか。將た又如何に簡明に罪惡慘禍の積極的制限に依つて、其影響を減殺せられたかを觀察するのである。アダム・スミスと等しく彼は一原因が單獨に作用す

充分なることは有り得可からざることであるから(Malthus: op. cit. 3d ed. Appendix)と云つてゐる。即ちマルサスに従へば、人口制限の作用は常に其効果を完うするに依り、過去に於て人口過剰は實際に實現せざりしと同時に、將來に於ても其實現の可能を否定するものである。唯注意を要するは、人口過剰が實際に實現せずと思惟する觀念と、若し何等の制限無き時は人口過剰を實現す可き潜在的傾向ありと思惟する觀念とは、決して矛盾せざる事である。而して此潜在的傾向と之を牽制する反對的傾向との間には、其發生の動因に本質的差別を存するに依り、此意味に於てマルサスが前者のみを力説するも敢て不可無き事である。若しそれ人智の進歩は能く食糧の増加をして人口の増加を凌駕せしむ可しとの意味に於て、或は又個人の發達は其生殖力を減退す可しとの意味に於て、若しくは其

の結果如何を究め、次で事實上如何に其原因が他の諸原因に依て制限せらるゝかを知らんと欲するものである。而して此制限こそは、彼れが完成せられたる「人口論」の大部分を占むるものなのである(Bonar: Philosophy and Political Economy. 2d ed. p. 207)故に分析と云ひ抽象と云ひマルサスの行へる所は決して無意義では無い。唯其結果として到達したる結論が畢竟平凡凡庸の理に過ぎざるや否や。彼れの功績を左右す可き重要な論點は此處に存するのである。而して Stephen は云ふ「凡庸の眞理と雖其眞理の未だ認容せられざる間は其開發は徒爾では無い。組織せらるれば直に自明の理なるを知るも、尙從來無視或は否認せられたる法則を論述するは、是れ功の至大なるものである。マルサスの場合は是に該當するで有らう乎。寧ろ彼は陳腐の事柄にバラドックスの衣を冠せて世人の驚異

を呼び、然も其後此バラドックスに關する解説を聞けば、結局陳腐以外には跡に何物をも残さなかつたのでは無い乎」(Stephen: The English Utilitarians, Vol. II, p. 148)也。然しマルサスの所説が假令窮極に於て深慮と道德との勸奨に終つたとは云へ、彼れが特に是等の行爲を人口問題なる特殊事象と不可分に連結し、此點より衆人の覺醒を促したのは確に争ふ可からざる功績である。若し善徳の勸奨を以て陳腐なりとすれば、彼は此陳腐に清新なる生命を吹き込んだものと云へる。況や其學説は、或は擁護せられ或は搏撃せられ乍ら、従前の社會問題の省察に一の重要な觀念を導入し、將來に於る社會改造の手段並に可能性に有力なる示唆と刺戟を與へたのは衆人の周知する所である。彼れの所説は或は眞理で無いかも知れぬ。又事實幾多の缺陷を具備してゐる。乍併恐らくそれは何人の反對を

も蒙らざる平明の眞理以上に、偉大なる貢獻を社會に寄與せるものと云ふを妨げぬであらう。然しマルサスの學説の眞價を此處に評價するのは固より尙早である。既述の如く彼れの「人口論」は、獨り人口増加の傾向を高調するのみならず、又是が制限に關して大部の叙述を費してゐる。吾人の省察は當然、諸種の人口制限作用に關する彼れの所論に移らねばならぬ。

## 七

「凡そ如何なる國家と雖、從來家族を扶養するの困難なる爲に早婚を制限するの必要無く、又出産後、悪習、都市生活、不衛生的職業、若しくは過重の勞働の爲に、人命を浪費する事の絶無なりし程に其風俗の純良質樸にして、且つ生存資料の豊富であつた實例を聞かぬ。随つて有史以來人口の増殖力が、全く自由に其勢威を揮へるが如き國家は未だ曾て無いのである」

(Malthus: op. cit. 2d ed. Ashley's ed. p. 80)。

今如上の言辭に徴するに、マルサスは一見「制限」なる用語に依つて、人口と食糧とを調節する各種の手段を意味する如くに見える。然し偶々彼れが「制限」の一として舉示するものに、何等人口或は食糧と直接因果の關係無きものを包容してゐる。例へば貧困或は是に對する恐怖よりして餓死、墮胎、晩婚、獨棲、幼兒殺生等を行ふ時は、そは明に人口の食糧に及ばず影響の結果と一應想定し得可きも、戦争、疫病、飢饉等に至りては必ずしも是と趣を等しうしない。固より一民族の膨脹に依り他國に殖民を希求せるに、其國が是を拒否する結果兩者干戈を交えたりとせば、そは人口問題に起因するの戦争と云ふを得可く、又人口膨脹の極勞働階級の貧困が肉體的に彼等の勞働力を減殺し耕作の能率低下し、爲に全國に渡りて穀物收穫の激減を來し、さら

ぬだに膨脹せる人口に充分の食糧を供給し能はずとすれば、そは明に人口問題に起因する飢饉と云ふ事が出来る。乍併暴君の征服欲に發源する戦争、季節の不順或は國際通商の杜絶に基く飢饉、更に又疫病の如きに至りては、何等人口問題に直接の因由を見出すことが出来ない。況や又其結果よりして是を考察するも、例へば戦争、疫病等の爲に突如人口を掃滅せられたりとせんか、そは決して人口と食糧とを調節するものとは云へぬ。何に故ならばそは食糧の分量の要求する以上に人口を減退せしめ、却つて生産要素たる勞働量の供給に支障を來す事すら有り得可きを以てである。要するに是等の慘禍は、如何なる意味に於ても人口の食糧に對する壓迫に基くにあらず、又嚴格なる意味に於て人口過増の傾向に對する「制限」とは認め難きものである。然るにマルサスが既述の如く、前軍中軍殿軍の比

諭を用ひて、斯く性的本能とも又食糧支給とも無關聯なるもの、換言すれば其所謂人口法則の圏外に立ちて作用する社會現象をも、尙無雜作に「制限」の範疇に算入するは、尠く其不用意無撰擇の感無きをを得ない。

次に第二版以後に於る道德的抑制の介入が、彼れの學說の色調を著しく改變せしめたるは、何人も承認する所である。乍併、之を以て直にマルサスが其最初の攻撃の標的たるゴドキンの理性萬能論に降伏せるものと解するは失當である。蓋し道德的抑制は固より理性の一發露に相違無きも、尙兩者の論旨には看過す可からざる逕庭を存してゐる。

第一に同じく理性に依頼して社會に於る一切諸惡の剷滅を希求するも、ゴドキンが性欲の絶滅を期待するに對しマルサスは性欲の抑制を勸奨する。故にゴドキンの所說に對する有力なる

改惡と兩立し得る以上は、マルサスの勸奨する道德的抑制は決して此原理と矛盾するものではない。絶滅と抑制との間には單に程度上の差異に止まらず、更に本質上の差異を存するのである。是れゴドキンの理性萬能論を極端なる空想として排斥するに拘らず、マルサスの道德的抑制説に傾聽する者有る所以である。随つて後者の爲せる修訂は疑も無く前者に歩を寄せたりとは云へ、是を以て直に降伏せるものとは首肯し能はざる所である。

第二に道德的抑制の追認に依りマルサスは罪惡と慘禍の關路に辛うじて救濟の微光を見出したが尙平等的社會組織を忌避する點に於て彼は終始ゴドキンと正反對の立場を固執してゐる。そは彼れが人生に於る明暗浮沈の原因に關しては個人を以て第一義と爲し、社會組織を以て第二義と爲し、然も第一義たる個人改善の爲に唯

反對論は、そが所謂「人性齊一」の原理に背戾する點を非難する。此原理は必ずしも人性が改善或は改惡せらるゝの不可能なるを意味するにあらず、唯人類は全然舊來の或る屬性を失ひ、或は全然新奇なる或る屬性を獲得する事は出來ぬと云ふのである。蓋し人類の人類たるは、其特殊の資質を有する故であるから、一旦之を失ふ時は最早人類では無くなるのである。苟くも人類なる種族の存續する限りは、理性と想像、感情と欲望との消滅する時は無いであらう。吾人は原始人が全然智能を缺如せりと想定する能はざると共に、又千年後の人間が全然情欲を滅却す可しとは想定する事が出來なう。(Bonar: Philosophy and Political Economy. 2d ed. p. 20)

然るにゴドキンの極端なる樂觀論は、此想定を敢て爲すの誤謬に陥つてゐる。是に反して既に「人性齊一」の原理が、優に人性の改善或は

一最良の手段を指示する道德的抑制を維持し普及せんが爲には、第二義たる社會組織を私有財産制度の上に建設するの必要ありと思料せる結果である。這個の消息に關しては私は既に前節の末尾に於て論述したから爰には再言の煩を省略する。固より私有財産制度を以て恒久最善の社會組織と爲す所說に對しては遽に左袒するを得ない。唯私の爰に云はんと欲する所は、マルサスは、明に其著第二版以後に於て其學說の原理の上に重要な修訂を施せるも、尙社會政策的見地に於てゴドキンと到底融合し難き所論を保持してゐる。随つて其所論の是非は暫く措き、之を以て「人口論」の修訂が「政治的正義」の論旨に降伏せるにはあらざる證左と見得ることである。成る程マルサスは第一版に於ては性欲を以て抑制し難き性情と爲し、第二版以後に於ては之を抑制す可き事を力説懲慙するものである

から、唯此點に關し此意味に於てのみ彼れの修訂は彼れ自身の最初の議論に對する論理的自殺と云ひ得るであらう。然しそれは該修訂を以てゴドオンとの論争に敗れたる表徴と爲す酷評より、マルサスを解放する事に何等の障礙をも提示するものではない。

思ふに一論敵の政治哲學を破碎せんとする限られたる目的の爲に、「人口論」の著者は當初人生の暗黒面を極端に力説する偏執に陥つたが、一旦彼れが所期の目的を達成したりと自負せる後、更に一段の高所に立ちて該問題を通觀せる時、諸種の論難より享受せる啓示と相俟つて彼れの胸底に道徳的抑制なる觀念の湧起せるは、極めて自然の數である。乍併、彼は此一手段の效果に全幅の信頼を置いて、人口増加の趨勢を單獨に防遏し、現世に蟠踞する罪惡慘禍の渦中より完全に人類を匡救し得可しと看做したので有

以上の論調は道徳的抑制の效果に關するマルサス自身の信念を明示するものである。彼は陽に道徳的抑制を勸奨するも、陰に其效果の微弱を感ずるのみならず、却つて獨身生活を保持する事久しきに及べば、淫佚なる誘惑に身を委ぬるの危険を増加し、當初制限せんとせる惡徳を反對に激成する事有る可きを憂慮せざるを得なかつたのである。童貞の理想を奨励すれば却つて惡徳の實現を助長する。此惡徳を輕減す可く早婚を許容すれば、人口と貧窮は隨つて増加するであらう。爰に於てかマルサスは恐る可きヂレンマに際會したのである。

彼は其遵奉する功利主義的倫理觀を以て此難局を解決せんと試みた。無産兒性交は最初明に彼れが罪惡の中に算入せし所であるが、後には之を寛恕せんとするかの口氣を洩らすに至つた。蓋し彼は之を以てかの人口過剩が貧窮及び

らう乎。否爰に尙彼は一抹の悲觀的暗翳を留めてゐる。而して所謂新マルサス主義は此點に其淵源を發したのである。

八

「余は余の嚴正に眞實と信する所に従ひ、吾人が子女を扶養し得るに至るまで結婚を遷延すべき義務有る事、並に同時に淫佚なる惡行に耽溺せざる義務有る事を述べた。然し余は未だ曾て是等の義務の双方は勿論、其一方すら完全に履行せらるゝ事を豫期する旨を述べた事は無い。衆多の場合に於て、此兩個の義務の一方を冒瀆すれば、他の一方の遂行を一層容易ならしむる事は有り得可き事である。——然し道徳家は此兩義務の實行を懇説し、各個人は其良心の命ずる所に従つて行爲しなくてはならぬ」(Gide and

Rist: History of Economic Doctrines, p. 129. Note に引用)。

男女の雜居、淫佚を伴ひ、多くの不道徳の原因となるに比すれば、比較的其害惡が尠少であると思惟せる爲である。彼れが「余は結婚に對する思慮深き制限 prudential check (注意——道徳的抑制なる慣用語を此處には回避してゐる)が、天折に優る事を認むるに寸毫も躊躇するものにあらず」と云ひ、或は「余は貧窮より生ずる惡徳の輕減は、此輕減に伴ふ他の害惡を償ひ得て餘り有り信ず」と云へるは、如何に彼れが如上のヂレンマより脱却せんとして苦しき辯解の辭を弄せるかを明示するものである。然も斯の如き一種の遁辭の爲に、彼は人間行爲の準則を其最初に意味せるが如き道徳的抑制の内容とは、著しく乖離せる功利の原理の上に移植するの矛盾に陥つたやうに見える。是れ畢竟彼れが道徳的抑制の效果に二心を抱き、其利弊の估料に關して迷路に立てるが爲めに、果然曝露し

たる一弱點と云はなくてはならぬ (Gide and Rist: History of Economic Doctrines p. 129-130)。

謂ふ所の新マルサス主義は此弱點の修訂に其緒を發したのである。彼等に從へばマルサスは性交欲と生殖欲とを混同してゐるが、此兩者は全く異なる動因を有し、判然區別せらるべきものである。前者は人類に恆久の不可抗の本能であるが、後者は屢々時代と場所の要請に應じて伸縮し得る性情である。隨つて吾人は後者の結果に憂懼する事無しに、前者を充足せしめる事が出来る。而して斯くする事が吾人が二重の作用、即ち一は自然の生理的法則に應じて性的本能を圓滿に發揮し、他は産兒と云ふ至高の義務を偶然の手に委ねず、又自由意志に基く外は母性と云ふ勞多き仕事より女性を解放する事を、同時に遂行するを得る唯一の方法である。更に

辭を濫稱するに至りし所以も一に爰に存するのである。

乍併、かゝる修訂の提示を知悉せば、マルサスは恐らく之を峻拒したであらう。彼れの眞意は明に童貞と結婚抑制との兩者を併び遵守するを以て、家族維持の能力無き者の必然負擔すべき道德的責務と爲し、極力之を徳普通及せんと企圖せるものである。偶々彼れが疑も無く罪惡と思惟せる一行爲を寛恕するが如き妥協的口吻を洩らしたのは、若し之を寛恕せざる場合に反動的に生ずる懼れ有る不測の禍害に比較する時は、未だしも其弊に堪へ得可しと信じた爲であつて、斯かる行爲を積極的に勸奨するが如きは

彼れの夢想だもせざりし所である。却つて彼は無産兒性交の如きを許容せば、結婚に伴ふ個人の責任感を薄弱ならしめ、淫蕩の弊風を社會に汎布し、必要の限度を超えて人口を過少ならし

又マルサスの教義は甚だ不道德である。何となればそれは基督教的禁欲主義に感染して生理學の法則に背馳し、其救濟せんとする害惡よりも一層の害惡を醸成するものである。彼の主張する獨身生活の強要は食物の缺乏以上の苦痛を包含してゐる。又晩婚は淫行を刺戟して私生兒の數を増加せしめ、結局道德の冒瀆に終らざるを得ない。故に吾人は宜しく無産兒性交を許容す可しと云ふのが、新マルサス主義の論旨の基調である。固よりそれは多様の洗練を経て遂に優生學と結合し、今日に於ては一層向上せる理想を包含するに至りしも、其淵源を探求すれば、畢竟人口過増の傾向が罪惡慘禍を誘致す可しとの危懼を抱懷する點に於てマルサスの所説を認容し、然も是が制限手段たる道德的抑制の内容に關してマルサスの所説に修訂を加へんとせるに始まり、彼等が敢て自ら新マルサス主義の名

め、國力の衰頹を誘致する一大害惡の發生す可き事を豫見してゐた。「余は常に不自然なる人爲的の人口制限手段を特に否認す可し。余の推奨する道德的抑制は全然是れとは趣を異にしてゐる。それは獨り理性に依つて指示せられ宗教に依つて裁可せられしのみならず、又最も著しき方法に於て産業を奨勵する傾向を有するものである」と云ひ、更に「斯かる制限手段は、全然人口の發達を阻害する所の反對の過誤に陥り易きものである」と附言せる辭句に徴する時は、現時文明諸國の一部に普及せる新マルサス主義の主張が、全然マルサスの眞意と相背馳せる所以を看取する事が出来る。

尙現存社會制度の下に新マルサス主義を實施する效果に關しては、私は別に大いなる疑懼を抱懷するものである。第一にそれは費用知識等の關係上、最も生活難の壓迫を蒙る事の激甚な

る、随つて又産兒育兒に伴ふ苦惱の最も峻烈なる可き貧民階級に、却つて最も普及し難き事情が存在しないであらう乎。而して一方産兒育兒の餘裕を豊富に有する富者階級が、却つて是等人生至高の義務を懈怠し放縱なる享樂を追求する誘因となるのでは無い乎。結局それは名のみ崇高にして、實は富者階級の玩具に終るのでは無い乎。否斯かる主義の提唱其ものが、既に裏面に潛む不健全なる思想を幾分反映してゐるのではない乎。

第二に縦令下層社會にも完全に實施せらるる假定するも、それは將して真正なる意味に於て彼等の幸福を増進する所以であらう乎。思ふに資本主義の桎梏より被搾取階級が解放せらるゝ道は、其手段の漸進的なる急進的なるを問はず、彼等が社會成員の絶對多數を制して其集團の力を鞏固にする事が必須の要件である。然る

は次に新マルサス主義が上流階級の專用に歸するとは反對に、マルサスの道徳的抑制が結局貧者のみの義務と化する不公正に就きて一言したいと思ふ。(未完)

### 消費組合の限界 (下)

濱 田 精 一

第二は心理上の相異である。之れには二つある。一つは上流及中流階級が利己的であつて、相互扶助の觀念に乏しいからである。彼等は友人を敬遠せんがために彼の家の周圍を土塀や石垣で築き上げる。未知の人に話しかけられることは彼等の最も嫌ふ所であり、一種の危険さへ感ずる。彼等は本質的に個人主義者である。然るに勞働者は之れとは異つてゐる。彼は社會主

に彼等が産兒制限に依り其數を減少する時は、總て集團としての彼等の闘争力も亦薄弱となる道理である。然らば新マルサス主義は、下層社會の刻下の窮乏を救済すと云ふ好餌の下に、永久に彼等を資本家階級の權柄に雌伏せしめんとする陰險なる譎詐を潛に包藏するか、尠く共之を助成する結果を招徠しない乎。約言すればそれは實施を急務とする筈の社會には之を至難とする支障有り、然も其實施を假定すれば多數者の不當なる隷屬的地位を恆久ならしむる缺陷を隨伴するにあらざるかを、私は疑ふものである。然し爰には新マルサス主義に就きて多言を費やす可きではない。唯吾人はそれがマルサスの理想と背離する事、並に此背離せる思想を發生せしめたる原因は、彼れの道徳的抑制に關する信念の不徹底に存せし事を看過してはならないのである。然も缺陷は單に此點に止まらぬ。私

義者、民主黨員、協働組合員となる自然的傾向を持つてゐる。相互扶助は工場の煙が濃厚な所であればある程發達する。従つて組合も之と比例してかくの如き處で發達するのである。今一つは、上流中流階級の虚榮である。彼等は店の主人や小僧に御世辭を澤山使つて貰ひさへすれば、少々品物の高い位は我慢する。そして御世辭と掛買とのために月末の支拂に困ることをも忘れて收入に不相當な金使ひをする。破産に陥るには掛買と御世辭とに血迷ふからである。然るに、帳場を越えて茶を賣る人は、組合員を華客として取扱はないで、友人と見做すのである。而し上流中流階級をして、此組合の精神を了解せしめることは左程困難ではない。其例として、ウルフ氏の擧げてゐるのが倫敦の實例である。勿論、此例は此場合を證明するものとしては、少々不適當ではないかとも思はれるのである